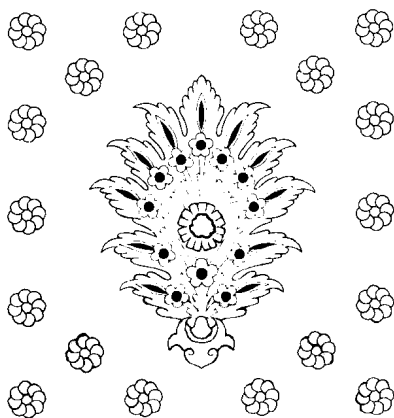


日本文学全集 /7

高浜虚子
長塚節
伊藤左千夫



集英社

日本文学全集

全88巻



17 高浜虚子
長塚節集
伊藤左千夫

昭和四十九年二月一日 印刷
昭和四十九年二月八日 発行

著者 高浜虚子
長塚節
伊藤左千夫

発行者 陶山巖

発行所 株式会社 集英社

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目二番五号
電話 東京(03) 556-2222 振替 東京 15555

印刷 大日本印刷株式会社
本文用紙 日本ペルノ工業株式会社

著者との了解により複印廃止いたします。
落丁本、乱丁本はお取りかえいたしません。

編集委員

伊藤	井上	中野	丹羽	平野
整	靖	好夫	文雄	謙

挿 装
絵 幀

三 後
芳 藤
悌 市
吉 三

目次

高浜虚子集

風流懺法

斑鳩物語

虹

愛居

音楽は尚お続きおり

小説は尚お続きおり

寿福寺

長塚 節集

土

七

三

四

四〇

四

三

五

八

伊藤左千夫集

野菊の墓

三七

隣の嫁

三七

注解

四〇五

作家と作品

山本健吉

四三

年譜

四四三

高浜虚子集

素
陰

子

ろに

あ
ろ
う
す

風流懺法ふうりゅうせんぽう

横河よかわ

今朝けさ阪東君ばんとうくんが出立しゅつたつするのを送られて和尚わしやうサンもあまり行けぬ口一杯過くわぎされた。阪東君が出立したあとで和尚サンはしばらく火燵ひたひた槽さうに頸あどを乗せておられたが、そのうち、「ちよつと一睡ひとねむりしますわ」ところりと横になられた。

叡山みづみの横河中堂よかわちゅうどうの政所せいしよに余はもう四五日滞在ざいざいしておる。たまたま京都に來た阪東君は昨日余を尋ねて登山とうざんして昨夜は和尚サンと三人枕さんじんまくらを並べて寝たが、今朝東塔とうたう西塔さいたうを一見して無動寺むどうじから白川口しろがわぐちに下つて京に帰るはずで出立した。余も明日は下山して阪東君と一両日京都で同

遊することに約束したのである。

横河は叡山の三塔のうちでも一番奥まっているので淋しいこともまた格別だ。二三町離れた処にある大師堂だいしどうの方には日によると参詣さんぎ人もばつぱつあるが、中堂の方は年中一人の参拝者もないといつてよい。大きな建物が杉を圧して立つておる。四方の扉は皆締めきつてあるのの中は真暗だ。ただ正面に一尺角ばかりの穴が開いておるのでそこから中を覗くと、その真暗な中に常灯じょうとう明が淋しくともつておる。政所はその中堂を十間ばかり離れた処に別棟になつて建つておる。そこに和尚サンが下男も置かずに一人で自炊しておられる。余も自炊の手伝いをしながら四五日滞在しておるのである。

和尚サンは布団ふだんから丸い頭だけ出して海老えびのようになつて寝ておられる。もうぐうぐうと眠られた様子だ。この和尚サンのお勤めは毎日一時間半ずつ中堂で看經かんきやうをせられることだ。そのほかに何も用事はない。その看經も時は一定してない。朝でもよい屋でもよい晩でもよい。要するに一時間半さへ勤められればよいのだ。だから眠い時は朝からでも眠られる。淋しい境涯きやうがいだがまた氣楽な境涯だ。

余は和尚サンの部屋を出て玄関の並びの自分の部屋に戻る。机に凭れてじつと耳をすます。静かだ。今は風の音も聞こえぬ、鳥の声もせぬ。何だか静かさが極点まで達しても、凄（すご）いような気もする。ほどなくポツリポツリと雨垂（しず）れらしい音が聞こえる。驚いて障子（しよ）を開けてみる。と、いつの間にか雨が降っている。軒の小坊主が光っては落ち光っては落ちてゐる。寒い。障子をたてる。

それから二時間ほど余は用事をしていて何事も忘れていた。ふと気がつくと和尚サンはまだ寝ておられる。雨はまだ静かに降っておる。台所に物音が聞こえるようだ。不思議に思つて行つてみると、暗い台所に白い衣を着た小僧サンが一人おる。流しの前に立つて何物か洗っているようだ。よく見ると今朝よごれたままの茶碗や皿を置いておいたのを洗つてくれているようだ。小僧サンは余の方を向いてニコリ笑つたが許（ゆる）儀（ぎ）もしない。

「君はどこの小僧サン」

と余が聞くと、

「大師堂」

と大きな声で答えて、

「どうして昨日湯に入りに来なかつたの」

と友だちのような口をきく。

「風邪（かぜ）をひいていたからサ」

「せっかく僕がわかしてやったのにナア」

「君がわかしてくれたのか、それはすまなかつた。この次（よ）ははいるヨ」

「僕はあすうちへ帰るのだヨ」

「君のうちはどこ」

「僕のうちは東京、だけれど京都に伯母（おば）サンがいるの、あすは伯母サンのうちへ行くの」

「伯母サンのうちは京都のどこ」

「祇園町」

祇園町とはちよつと意外であつた。

「祇園町というのはどこ」

と試（こころ）みに聞いてみる。

「祇園町を知らないのか。ばかだナア」

と小僧サンははなはだ輕蔑（けいべつ）した調子で、

「君はいつまでここにゐるの」

「僕（わ）か、僕（わ）も明日（あす）京都へ行くつもりなの。いゝヨここに拭巾（ふきぬ）があるから拭くのは僕（わ）が拭くヨ」

「まあ貸したまえ僕（わ）が拭いてやらア。明日京都へ行くの

か。この次にはいるナンテ、今度いつ湯がわくと思つて
いるのだ。間拔けだナア、五日目五目目でなけりやわ
かないのだヨ」

機鋒鋭くして当るべからずだ。

「そうか、それじゃ大師堂のお湯にはもうはいれない
ね。困ったナア」

「困らなかつたつていいや。アンナ汚ない湯にはいらな
くつたつて京都にいくらでもいい湯があらア。君、湯は
東京より京都の方がいいヨ。京極にいい湯があるぜ、蒸
気でわかすのだヨ」

「君はいつ小僧サンになつたんだい」

「二月」

「二月つて今年の二月かい」

「ウン」

「東京にはいつまでいたの」

「去年まで。尋常を卒業するとコチラへ來たの。君、桜
田小学校知つてるか。僕あそこに行つてたんだヨ。山
崎や戒田は今年高等二年になるんだつて威張つてらア。
こないだ手紙をよこしたヨ。字ナンカやつぱり下手だ
ア。ネー君、いくら威張つたつて字の下手なのはみつと

もないや」

小僧サンは茶碗や皿を戸棚に片づけて台所を掃除し
て、ズンズン余の部屋にはいつてくる。

「君勉強しているのかい。君全体何しに來たの。遊びに
來たのかい。……ばかだナア、コンナもの書いてらア。
全体何の画だい。下手だナア。僕の方がよっぽどうまい
や」

と火鉢の向うに坐つて机の上に置いておいたノートブッ
クを開けて痛罵を試みはじめる。

暗い台所から明るい部屋に來てみると小僧サンはなか
なか美少年だ。年は十二三で、色白で、目が大きくつ
て、口元が締まつている。

「よう君、何を書いたんだい。密壇の画だつて。こんな
密壇があるものか。ばかだナア。礼盤がこんなに小さく
て、脇机がこんなに大きくつてどうするんだい」

元來画心のない余が文字代りに急いで書き取つた図を
さんざんに攻撃する。

『朝念觀世音、暮念觀世音、念々從心起、念々不離心』
……ヤーイ十句觀音經なぞ書いてらア、間拔けだナア。
……『こんな処へ落ちたら死にますエ』……『強儀なこ

としたもんだつせ』……こんなこと君書いてるのかい。

こんなこと書いてどうするんだい。本当にばかだナア」と余の顔を見る。大きな目に冷笑の光を漲らせておる。

「全体君は何だい。何を仕事にしているんだい。妙なことを書き留めとくんだナア」

と独り言のようにいいながら、紙の間に挿んであつた鉛筆を取って余の顔を写生し始める。ちよつと空目を使つては書きちよつと空目を使つては書く。

「だめだナア、君は動くからだめだ。ここの和尚サンを書いてみようか。ここの和尚サンは大きな頭をしているだろう。こんな頭だぜ。それからねえ、耳がこんなに……まるで蝙蝠のようだぜ。僕は和尚サンと向き合つてるといつでも頭と耳ばかり見てやるのだ。君、君」

とだんだん声を張り上げてきて、

「それからねえ君、和尚サンの耳は動くぜ。不思議だぜ。どうかしたはずみにびこと猫のように動くんだもの、僕ア不思議だと思つちやつた」

和尚サンは「ウーン」と布団の上に白い片腕を突きだして片々の手で擦っておられる。

「ヨセヨセ、ソナン人の悪口をいうものじゃない。君は

腕白だナア」

と余は最中を三つやる。

「ありがとう」

とさっそく一つ頬ばる。余の飲みさしておいた茶碗の上に冷たい茶を注ぎ足して飲む。

和尚サンは、

「アアよく寝たこつちゃ」

と欠びをしながら起き上られる。

「一念、来ていたか。お客様の邪魔をしてはいかぬぞ」

「邪魔なんかするのですか」

と手帳の上に和尚サンの欠びの図を書いて顔じゆう口にする。そうしてその口から棒をひいて「一念キテイタカ、お客サマノジャマシテハイカヌゾ」と書いて、また耳から棒を引いて「コノ耳ウゴク」と書く。余は覚えず噴きだす。一念は知らぬ顔をして、

「宝珠院サンは今日午から下山のつもりだから、そういつてくれといいましたヨ」

とちよつと和尚サンの方を見てすぐ今度は眼鏡を掛けた和尚サンの似顔を描く。見るとなるほど龍甲縁の大きな眼鏡を掛けて和尚サンは何か書つけを見ておられる。

「きょうは十二日だな」

と迂遠なことをいわれる。

「十四日ですよ」

と余は答える。

「十四日か。もうそうなるかな。あなたが来たのがおとと日であつたかな」

余はもう五日間滞在しておる、それを一月ほどにも覚えるのに和尚サンはのんきなことをいわれる。

「あなた蒔の臺好きか。納豆はどうかな」

「納豆は閉口ですが、蒔の臺はけっこうです」

「それではあすお帰りまでに蒔の臺の田楽をひとつ拵えてあげよう。きょうは雨だから困るが、兜率谷の方に行くと蒔の臺がたくさんある。あすの朝天気になったら一念ひとつ取ってきてんか」

一念は聞かぬ風をして「明治二十八年十月二日生一念」と鉛筆を圧えつけて四角な字をノートに書いておる。

「蒔の臺の田楽といひますのは」

「蒔の臺を串にさして味噌をつけて焼くのじゃ。よほど香りのええものじゃ。蒔の臺が嫌いではけりやキツと賞

翫おしるじゃあろ」

「そりやけっこうでしよう。兜率谷という恵心廟のさきの方ですね。それじゃ私が取ってきましよう」

余はここに来てからまったく精進料理ばかりを食っておる。それも煮豆に焼湯葉に味噌が主で、豆腐汁やほうれん草のしたし物などは坂本からの好便に豆腐やほうれん草が届かなけりや食うことがでせん。そんな中に蒔の臺の田楽は聞いただけでも珍味だ。もうその香が室内に満ちているような気がする。

一念は余が机の上をかき探していたが、

「これ、君何だい」

と安全剃刀に目を留める。

「剃刀だよ」

「剃刀だつて。ばかだナア。こんな剃刀で君は髯を剃るの。うまく剃れるかい」

としきりにひねくつて見ている。

「一念、御邪魔をせんようにして、少し台所のことでも手伝ってくれよ」

「一念君は最前もう大変働いてくれました。茶碗や皿をすっかり洗ってくれました」

「そうであつたか。それは御苦勞であつた。ついでに氣の毒だが、茶釜に一杯お湯をわかしにくれまいか」

一念はだまつてまだ剃刀をいじっている。

「どうやって研ぐんだい」

「こうやるのサ」

と余はやつてみせる。

「ばかだナア」

とふたたび受取つて、

「君いつ剃つたの。今剃つてみたまへな。よう、剃らないのかい。ばかだナア」

と感心する時も不平な時も「ばかだナア」という。

「一念、お湯をわかしにくれまいか」

和尚サンはゆつくりとまたくりかえされる。

「君、和尚サンが何かいっておられるじゃないか」

「剃つてみないのかい。間抜けだナア」

と一念はいかにも残り惜しように剃刀を見返りながら台所に立つて行つた。ほどなく茶釜の下を燻し始めたらしい、松葉のばちばちという音が聞こえる。

「なかなか才はじけた小僧サンですね」

「どうもいたずらで困りものだ。その代りお経もよく覚

える、役にも立つ、育てようによつたら立派なものになりますやろ。……大變降るようだな。阪東サンはお困りじゃある。もう十一時か」

和尚サンは火燵から出て背延びをせられる。大きな頭が目についておかしい。一念は何をしているのかただ松葉のはねる音が聞こえるばかりだ。

和尚サンは火燵櫓をのけられる。そのあとがすぐ炉になる。そこに鉄瓶をかけてそのへんの埃を拾うては炉の中にくべられる。

「お茶を入りよう。仕事の切れ目ならお出でんか」

「ちようだいしましう」

と炉の向う側に坐る。

「わしは冬でも簾枕をするので……きようはどういう具合であつたか頭がしびれたようだ」

と下にしていられた右側を掌で擦られる。見ると枕の角の痕が赤く頬に残っておる。

「寝がえりもなさらず片側ばかり下にしていらしつたらでしう」

「寝がえりというものは平生からあまりしませぬて。戒律に頭北西面右脇臥ということがやかましくいうてあ

るが、頭北西面は間取りの都合などで厳密には行かぬにしても、僧はたいがい右脇臥ということだけは守っておる。ことに仰臥は非常に嫌うので、仰向けに寝ると淫心を起こすともいふし、淫を齎ぐものは仰臥するともいふし、かたがたそれはかならず避くべきことになっておる。その理由はともかく、出家が大の字になって寝るのはあまりみっともないものでな」

和尚サンはきびしい終りの一二滴を余の茶碗と御自分の茶碗とに等分に落とされる。鉄瓶の湯気が真直ぐに登って和尚サンの顔のあたりで消える。

「和尚サンおいくつです」

「わしかな、もうちようどじや」

「五十ですか」

「そうじや。もう来年ぐらいからは小僧か男を一人置かねと、自炊が億劫じや」

「そうでしょうとも。一念サンは宝珠院サンの御秘蔵ですか」

「宝珠院は持てあましておるのじや。わしに預ってくれともいふとるのじやが、わしの手にもあまりそうじやで。ハハハハ」

と最中のこわれているのを掌に載せて丁寧にたべられる。炬の縁にこぼれたのを指尖でおさえて口へ持つて行かれる。

「和尚サン、お湯が沸きましたよ。サヨナラ」と一念の声がする。

「そうか、それはお世話であつた。もう午じや。茶漬なと食べて行かんか。……アア、そうおし。一念一念」と延び上るようにして大きな声を出される。なるほど和尚サンの耳は少し動く。ノートに書いた一念の画が思いだされておかしい。しかし一念はもう裏口から帰つたものと見えて返辭がない。

一 力

仲居のお艶に、

「それが名高い赤前垂れかね」

と聞くと、お艶はちよつと気取って蠟燭の心を切つて、

「そうどす。これは一力ばかりに限ったことやおへんけど、こうやって帯に挟む具合がよそとは違つてますのや」

という。阪東君が、

「ちよつと立つてみせたまへ。長いのかい」

ときくと、お艶はだまつて立つて、帯に挟んであるのをはずしてみせる。大幅の緋の縮緬を二枚合わせた広いのが、チャンと並べた足を隠して幔幕のように畳の上に垂れる。広い座敷に林のように立っている蠟燭の光りがこの赤前垂れ一つに集まる。その時向うの銀紙で張った衝立の陰から今日四条の雑店で見たような舞妓が一人現われる。同時に衝立の中から、

「三千歳はんあげます」

という声が聞こえる。舞妓は余らの前に指を突いて、

「姉はん、今晚は」

とお艶に会釈する。厚化粧の頬に脂ができて、唇が玉虫のように光る。お艶の赤前垂れの赤いのがこの時もとのとおり帯の間に畳まれて、極彩色の京人形が一つ畳の上に坐っている。

「お前いくつ」

「十三どす」

「ほんまに可愛い見どすやろ。私ら毎日見えますけど、見るたんびに可愛て可愛てかないまへんわ」

とお艶は銀煙管に煙草をつめる。

「その帯は妙な結びようね」

「これどすか、こうやって、ここをこう取って、こっちやに折って、こう垂らしますのや」

と赤いハンケチを膝の上でたがねてみせる。白い指がそのハンケチにからまつて美くしい。

「何というのその名は」

「だらり」

「髻の名は」

「京風」

「櫛は」

「これどすか」

と白い手を前髪の後ろにやって、

「花櫛、これは前髪くくり。あなた何書いといやすの」

と余のノートを覗きこむ。

「三千歳はん、今日虚空藏様へお詣りやしたか」

「ハ」

「何というてお拝みた」

「あほうどすさかいに智恵おくれやす、というて」

銀紙の衝立の陰からまた人形が一つ出る。